

教育新聞

発行所 教育新聞社
〒110-0005
東京都台東区上野3-17-7
代表 電話 03 (3832) 3 5 7 1
FAX 03 (3832) 3 5 7 0
URL <http://www.kyobun.co.jp>
E-mail kyoiku@kyobun.co.jp
購読料 2625円 (月額、税込)
振替口座 00170-6-4369
©教育新聞社 2010
週2回 月・木発行

分野を超えて 社会科 授業を 創る

新学習指導要領で
求められるもの

玉川学園マルチメディア
リソースセンター研究員
多賀 譲治

が、師フォンタネーシから得たものを終生持ち続け、ロシア留学からの帰国後、東京・神田駿河台の日本正教会の女子神学校内にもってイコンを描き続けた。連載の締めくくりとして、私はこのことを取りあげたいと思う。

フォンタネーシは、イタリヤ独立戦争に従軍後、ヨーロッパ各地を放浪し、バルビゾン派やリヨン派の画家たちと交流し、印象主義を学んだ実力派である。借金返済のため日本にやってきたというが、学生たちの輝く目に教師としての心に目覚めた。

後に洋画界で活躍する浅井忠、山本芳翠、小山正太郎、五姓田義松、松岡寿はすべて彼の教え子たちである。フォンタネーシは幾何学や遠近法、解剖学といった基礎から風景・人物画、水彩、油彩などの応用をうまく組み合わせ、極めて適切に教え子を導いた。その講義内容は高度で想像できる。彼の後任であったフレレンティはもちろん、次に就任したサン・ジョヴァンニの教え子の中からも西洋画家として大成した者が一人も出なかったことはフォンタネーシが優れた教育者であったことを証明している。

浅井忠や山下りんが、彼ではなくフレレンティに師事していたら、果たして後世に残る仕事をなし得たであろうか。工部美術学校に入学してくる学生は幼い時からその才能を認められてきた者たちであった。その「選ばれた者」ですら、教師の力によって宝石にもなれば石ころにもなってしまうという話である。

フォンタネーシが後任教師のように技量もなく情熱もなく、したがって工夫もなかったら、日本における西洋画の有り様は大きく異なっていたに違いない。このことは今日の私たちにおいても同様であり、通り一遍でお仕着せの授業しかできない教師の下で、子どもたちの興味を引き出し、才能の芽をばくむことはできない。

自分自身の授業を創るのは並大抵ではないが、続けることである。連載でも触れてきたように教材の種は至る所にあふれている。

大切なのは職業としてのスキルというより、フォンタネーシが輝く目に動かされたのと同様の「子どもを思う気持ち」である。教師もまた一人の人間である。自分しかない芽をばくむむために「自分の授業」創りを目指すべきなのである。

子どもの可能性を引き出すために

子どもにとって教科の好き嫌いというのは、多分に教師の人間性や力量に負うところが大きい。安政4(1857)年に生まれ、明治の初期にイコンを描いた女流画家「山下りん」は工部美術学校に入学し、たった1年だけ師事したイタリアン教師フォン

タネーシの影響を大きく受け、当時としては困難を極めた西洋画の基礎を学び開眼した。ところが、後任の教師フレレンティは人格、感性、技量ともに劣り、多くの画学生が失望し、退学したという。その中にりんも交じっていた。

あるにもかかわらず、分かりやすく、すぐぶる評判の良いものであったという。

今日、その具体的な講義内容に分らないが、初めて西洋画に接する民族の子弟に、多彩で伝統ある西洋画の技法と心を伝えるため、教員、教材、授業の展開に腐心し、工夫を加えていたことは容易に

自分の授業を創るといふこと

(おわり)